

川崎市教育委員会賞作品

「温かい心あふれる川崎」

百合丘小学校 6年 土方 玲志

ぼくは5年生の春、ダウン症のT君に出会いました。T君は転校生だったので、学校のことがよくわからなかったのか、転校してきた初日には朝の会できつ然前に出てきて、腹おどりをしました。クラスのみんなは、びっくりしてT君をさけるようになりました。

転機が訪れたのは6月頃でした。ようやくT君が落ち着き始めた頃、一人のクラスメイトが「ぼくは〇〇って名前だよ」とT君に話しかけました。最初は戸惑っていたT君も、状況を理解すると「〇〇!」と返しました。これが、T君がぼくの学校に来て初めての会話でした。それから同じようにして、T君はたくさんの友達をつくり、あっという間にクラスのアイドルへと変わっていきました。

その後、ボランティア委員会で緑の羽根共同募金をしていたとき、ぼくは羽根をぬくのが速く、一方のT君は元気に笑顔で羽根を渡すのが得意だったので、連係プレーでスムーズに協力して活動することができました。そのことを通して、障がいのある人でも個性を活かした活動で力を発揮できるのだと知りました。しかし、その時羽根を受け取った人たちは、T君の独特な声や行動に戸惑っている様子でした。それはおそらく障がいのある方との交流をしたことがなかったからだと思います。なので、障がいのある方と接する機会が必要だと感じました。

障がいのある方と接する機会をつくるには、自分の好きなことと関連して考えるとやりやすいと思います。なぜなら、好きなことはよく知っているので、障がいのある方でもできるような応用をしやすいからです。一つ例を挙げてみます。ぼくはフロアボールというスポーツをやっています。近所の小学校の体育館で行っていて、それくらいの広さがあれば誰でも身近にできます。道具も簡単にそろえることができます。ただ、スポーツなのでルールは複雑で障がいのある方がやるには少し難しいかもしれません。そこでどうやったら障がいのある方と一緒にフロアボールができるかを考えました。

ぼくはフロアボールの中でゴールを決めた瞬間が一番嬉しいです。障がいのある方にもそれを味わってもらいたいと思い、PS（ペナルティストロウ、サッカーでいうPK）戦はできると考えました。当然のことですが、障がいのある方が無理なくできることが絶対であり、障がいのある方、健常者の両者が楽しめないといけません。そういうことも考慮しながら障がいのある方と健常者が交流できれば良い関係は築けると感じました。

ぼくは以前、アンブティサッカーや車いすバスケット、ボッチャの体験など様々な障がい者スポーツの体験をするイベントに参加したことがありますが、障がいのある方との交流はありませんでした。ぼくはせっかくの機会なのに障がいのある方との交流がなかったことが残念だと思いました。でも、そういうところを工夫して補えば、みんなが楽しめる交流会ができると感じます。

ぼくは将来、川崎市が障がいのある方も誰でも受け入れられ、みんな一緒に活動できるような温かい心があふれる町になればいいと思います。そのために、まずは自分の学校から交流をしていって、習い事、地域へと広まっていけばいいと思います。